経過観察を行なっていたが，1992年4月再び左腎出血出現。選択的左腎動脈造影にて動静脈瘻（cirsoid type）と診断し，同時に steel coil を用いて embolization を行なった。術後4日目には肉眼的血尿消失し，7カ月経過した現在も再出血を認めていない。

19．腎盂尿管移行部狭窄に伴う自然腎盂破裂の1例

李　瑞仁　（千大）

症例は44才，女性，主訴は右側腹部痛。現病歴は S.50年代他院で IP にて，右腎盂尿管移行部狭窄，右水腎を指摘されても，放置した。H4年4月間歇的右側腹部痛出現し，近医より紹介受診，6月8日再び激痛出現し，緊急入院となった。入院後 IP にて右腎盂拡張を認め，右尿管は描出されなかった。Enhance CT では腎盂より腎門部にかけて造影剤の漏出，腎門部周囲に貯留を認められた。以上により腎盂尿管移行部狭窄による自然腎盂破裂と診断し，翌日緊急腎盂形成施行した。腎盂自然破裂と鑑別診断を要するものに自然腎盂外溢流がある。これは腎盂内圧が上昇した時生じる腎杯円蓋の顕微鏡的破裂である。腎盂尿管移行部狭窄による自然腎盂破裂は本症例が5例目と思われた。

20．尿管結石による自然腎盂外溢流の1例

武田英男，外間孝雄
（国立習志野）

症例は35才，男性。主訴は右側腹部痛，血尿。平成3年12月24日，右側腹痛および血尿にて近医受診し，右尿管結石の診断にて入院。翌日の DIP，CT にて造影剤の腎盂外溢流が認められたため，12月26日，当科に紹介され入院。入院後，疼痛増強し，発熱高度のため即日経尿道的に，6Fr ダブルJステントカテーテルを腎盂に留置。カテーテル留置時に，尿管結石は，腎盂内へ push up された。カテーテル留置翌日には，右側腹痛は軽減し，下熱傾向を示し，留置後2週間後の DIP では，腎盂外への造影剤の溢流は消失していた。全身状態改善した上で，結石の治療として ESWL を行なった。自験例を含め本邦90例について集計を行なった。

24．膀胱ヘルニアの1例

安部　睦，永嶌　薫，片海七郎
（君津中央）
藤原恭一郎　（大和クリニック）

症例は61才，男性，初診は1992年4月3日，主訴は無症候性全血尿。以前より右鼠径部に腫瘤を触れるのに気づいていたが放置，同年3月24日頃突然無症候性全血尿が出現し，当科を受診した。観診上右鼠径部より陰嚢内にわたり手拳大の腫瘤を認め，膀胱鏡検査・膀胱造影・排泄性腎盂撮影より右陰嚢内膀胱ヘルニアと診断した。手術所見；膀胱壁には異常を認めず，ヘルニア門は内鼠径輪より骨盤腔へ二横指の開大を認め，ヘルニア嚢は存在せず，腹膜外型膀胱ヘルニアの所見であった。術後膀胱造影上ヘルニアは消失し，現在再発を認めていない。自然例は本邦43例目の報告と思われ，これらについて若年の文献的考察を加えた。

27．妊娠23週で発見された膀胱腫瘍の1例

須賀喜一，日景高志，川村健二
中村　剛　（東京厚生年金）

症例は27歳，女性。妊娠23週。主訴は肉眼的血尿。膀胱鏡にて左尿管口付近に径2cm の乳頭状有茎性腫瘍を認め，膀胱腫瘍の診断にて平成3年6月21日全麻下で TUR-Bt を施行。術中，術後とも子宮収縮が頻回に見られたため子宮運動抑制剤を使用した。病理学的診断は TCC，G1＞＞G2。この結果より妊娠の継続は可能と判断。手術後胎児の成長良好で10月7日39週にて正常分娩にて男児を出産。現在まで再発を見ない。本症例は本邦7例目と思われる。

35．Piezolith 2300による ESWL の治療経験

高尾昌孝，香村衡一（国立佐倉）

1991年4月～1992年3月の1年間に当科で施行した ESWL の治療成積を検討した。治療6カ月後の完全排石率は，腎結石70.7％，上部尿管結石68.8％，下部尿管・膀胱結石100％であった。中部尿管結石，結石径が2cm 以上の症例など治療困難要因も存在するが，本装置は外来治療が可能な機種として臨床的に有用であると思われた。

36．当院における ESWL の治療成績

納谷幸男，甘粕　誠，南出雅弘
（横浜労災）

1991年7月～1992年10月まで，176例に対し，Dornier MFL 5000を用い，ESWL を施行した。ESWL 単独の治療成績は，腎結石において奏効率95.7％，完全排石率81.2％。尿管結石においてそれぞれ96.8％，89.4％であった。平均治療回数は腎結石2.74回，尿管結石2.02回であった。補助療法として PNL を17例，PCN を3例，TUL を2例に施行した。結石成分はシュウ酸カルシウムが77例，シュウ酸カルシウム＋燐酸カルシウムが36例